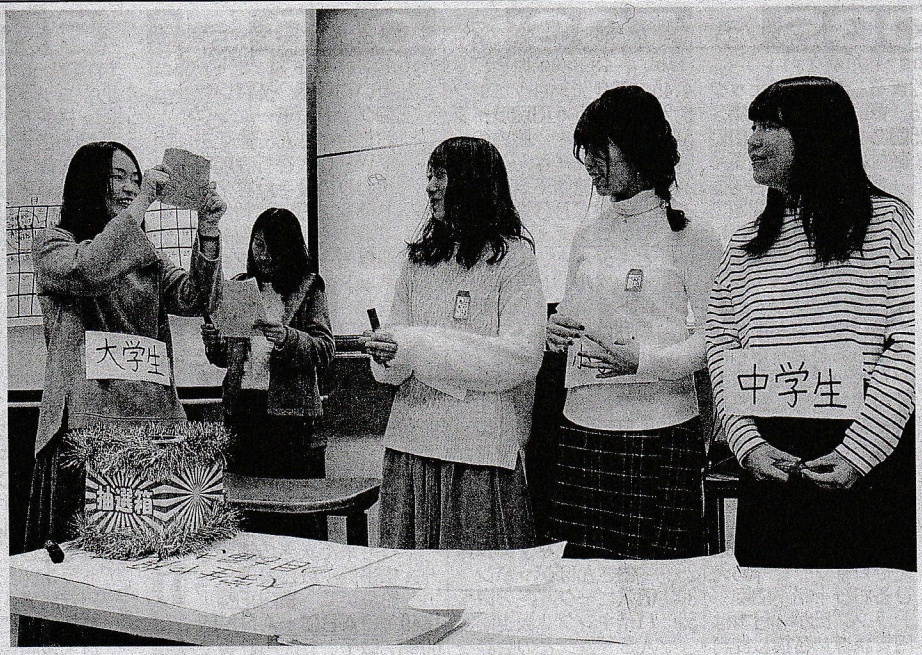

子ども食堂での「理想的な過ごし方」を寸劇でプレゼンする大分大の学生＝1日午後、大分市、撮影・鈴木幸一郎

青が咲く

子どもにとって魅力ある居場所とは―。大分大学経済学部の学生30人が1日、全国で開設が相次ぐ「子ども食堂」での理想的な過ごし方を提案した。体験型の主権者教育を目的にした大分合同新聞社との連携授業「地域社会の課題解決型ワークショップ」の取り組み。交流活動で社会・地域・家族の在り方を模索してきた後期授業の集大成として、若者目線で考えた。

理想の「子ども食堂」プレゼン

光る〝若い感性〟

学びの基礎 現場で育む

「施設の空き部屋をもっと有効活用しては」「学級通信を作り、保護者に配ってはどうか」「食育も目的の一つにした方がいい」。寸劇、動画、スライド…。趣向を凝らしたさまざまな発表が相次いだ。

後期最後の授業となったこの日、1～4年の男子12人、女子18人が6班に分かれてプレゼン。教員陣5人に加え、大学近くの子ども食堂「すみれ学級」（大分市敷戸西町）の関係者らが見守った。

学生は昨秋から、同学級や県内各地の子ども食堂を訪問。地元の小・中学生と触れ合う一方、一緒に食卓を囲み、運営上の課題点や改善策などを班別に検討、議論してきた。

女子5人のチームは、子どもたちの連帯感を育む試みとして「料理教室を開き、それぞれの頑張りを評価できるようにすればみんな熱中する」と提案。有意義に過ごすための目標カード作成や、勉強と遊びに集中できる空間づくりを考えたグループもあった。

すみれ学級は昨年8月、県内で調剤薬局を運営する会社「そうりん」（同市）が社会貢献の一環で始めた。藤井富生社長(69)は「私たちでは気付かないような、学生らしい感性が発揮された発表だった。今日のアイデアを運営に取り入れたい」と講評。

連携授業を1年間担当した市原宏一教授(57)、石井まこと教授(50)、佐藤隆准教授(46)は「学生たちは現場での体験で課題を整理し、目的意識を持って発表できていた。（連携授業を通して）これから学んでいくための基礎ができたと感じている」と総括した。

（萱嶋悠）

ユーモアあふれる発表に教室は盛り上がった

連携授業　大分合同新聞社の創刊130周年記念企画。包括連携協定に基づき昨春スタートした。前期は1年32人が18歳選挙権や社会的差異について考え、後期は1～4年30人が受講。本紙記者2人が非常勤講師となり、年間企画「青が咲く」朝刊編で受講学生の成長を追っている。

12日付朝刊に特集

福岡で臼杵
観光と物産

【福岡支社】
杵フェア」が1
の大丸福岡天神
た。臼杵市の観
広くPRしよう

年金
地

亡くなった実
いるように装っ
を不正受給した
印私文書偽造・
欺の罪に問われ
ノ瀬、アルバイ
本里美被告(55
は1日、懲役2
刑懲役3年6日
言い渡した。被
しない方針。
家入美香裁判